

# 『奥の細道』小見

板 坂 元

## 一、ハ行ワ行下二段の動詞について

奥の細道の中でハ行・ヤ行・ワ行の二段活用動詞が混同して用いられているのは周知の事実であるが、一見恣意的に見えるこの現象も必ずしも乱雑な状態になつていないように思われる。(これは本文理解の上さまたげにならないために、テキキストによつてはこの個所を本来あるべき姿に書きかえてしまつたものが多く、さもなければ本来あるべき姿を註して本文を破格乃至は誤用のあつかいをしている。しかし、何らかの法則性をもつてこの現象が存在しているからには、あるべき姿ではなくある姿のままに読みとられねばならないことは云うまでもないであろう。) 一応左に列挙して考察することにする。

(カッコ内の数字は、杉浦正一郎氏編「校註奥の細道」の素菴本井筒屋板影印本・武蔵野書院刊の頁数・行数をそれぞれ示す)

- 1 馬の口とらえて (一・二二)
- 2 老をむかふる物は (一・三三)

- 3 海浜にさすらへ (一・八)
- 4 笠の緒付かえて (二・六)
- 5 三里に灸すゆるより (二・七)
- 6 世に伝ふ事 (七・五)
- 7 墨染に様をかえ (一・三)
- 8 申伝え侍る也 (二・三)
- 9 うる／＼敷旅人の道ふミたかえん (一三・六)
- 10 とりあへぬ一句を (一九・二)
- 11 田一枚植て立去る (二一・二)
- 12 里のわらへの来りて教ける (二七・一)
- 13 人の教ゆるにまかせ (二八・五)
- 14 行末をかゝえて (三一・三)
- 15 今にありと教ゆ (三二・五)
- 16 あるひは植継なとせし (三四・三)
- 17 名所を考置侍れは (三五・七)

- 18 十符の菅菰を調て (三七・八)
- 19 歌枕おほく語伝ふといへとも (三九・三)
- 20 浙江の潮をたたふ (四四・八)
- 21 緒たえの橋なと聞伝て (四九・七)
- 22 終に路ふみたかえて (五〇・一)
- 23 反脇差をよこたえ (五七・二)
- 24 檉の杖を携て (五七・二)
- 25 長山重行と云物のふの家にむかへられて (七一・三)
- 26 南に鳥海天をさゝえ (七四・七)
- 27 海北にかまえて (七五・二)
- 28 悲しみをくはえて (七五・七)
- 29 荒海や佐渡によこたふ天河 (七八・二)
- 30 木曾義仲願状にそへて (八五・八)
- 31 古松植ならべて (八七・五)
- 32 若き僧ども紙硯をかかえ (九一・七)
- 33 とりあへぬさまして (九二・二)
- 34 一辨を加るものは (九三・一)
- 35 いまだ存命してそくくと教ゆ (九五・八)
- 36 寂しさ感に堪たり (二〇二・七)
- 以上三六例が奥の細道中に見出されるハ行・ワ行の下二段動詞のすべてである。(そのうち、5・11・16・31の四つがワ行で他の三二例はハ行の動詞であることは云うまでもない。) これらの中で、11・12・16・17・18・21・24・31・34・36の十例は活

用語尾の表記がないため当面の問題には役立たないので結局残りの二六例について考えて見ることにする。まず活用語尾をヤ行に表記されているものは、かかえ(14・32)、かえ(4・7)、教ゆ・教ゆる(13・15・35)、ふみたかえ(9・22)、とらえ(1)、ささえ(26)、かまえ(27)、くはえ(28)と、すゆる(5)の一四である。また、ハ行に表記されているものは、とりあへ(10・33)、むかへ・むかふる(25・2)、さすらへ(3)、たたふ(20)、そへ(30)の七つとなつてゐる。なおこの外に、伝ふ(6・19・8)と、横たふ(23・29)の五つの場合はハ行とヤ行と両様に活用語尾がなつてゐるものである。最後の二つの動詞が問題となるが、これは別に述べることとして、わずかな例であるが芭蕉の文には規範文法でハ行とされるものにハ行とヤ行の表記の区別があつたのではないかという見通しだけはつけられそうである。それが当時の一般的な現象であつたかどうか、また何故にハ行とヤ行に区別されたのか等々、問題は非常に大きくなるがなお精査を要することなので、こゝには現象的に右のことを報告するにとどめたい。なおこれに関して興味のあることは、曾良自筆本奥の細道がこれらのハ行動詞について特異な表記をとつてゐることである。私は同書を見抜く機会を得ていないが、杉浦正一郎氏が雑誌「語文」第二輯(大阪大学国文学研究室編、二六年三月発行)で井筒屋板素竜自筆本と同書との詳細な異同を示してをられるのでその異同表によつて所要事項を書き抜いて見

ることにする。(一ばん上のローマ数字はさきに例示したときの番

	頁・行	素菴自筆本	曾良自筆本
1	一・二	馬の口とらえて	とらへて、をえに改め又夫を消す
4	二・六	笠の緒付かえて	付かへて、をえとし、又夫を消す
7	一一・三	墨染に様をかえ	さまをかへて、をえと改め又夫を消す
9	一三・六	ふみたかえん	ふみたかへむ、をえとし又夫を消す
14	三一・三	行末をかかえて	かかえのえをへに改む
22	五〇・一	ふみたかえて	ふみたかへて、とし後たかえ
23	五七・二	よこたえ	よこたへのへをえと改め又夫を消す
26	七四・七	鳥海天をさへ	ささへ、をえと改め又夫を消す
27	七五・二	海北にかまえて	かまへてのへをえとし、又消してへとす
28	七五・七	くはえて	くはへて、としへをえと改め又へとす
32	九一・七	かかえ	かへて、としへをえと改め又へとす

号を、つぎの和数字は武蔵野書院版の頁数・行数をそれぞれ示す。校異の表示法は杉浦氏の示されたものをそのまま写してある)

以上の十一例の外に12・13・15・35の「教ふ」を12だけ「をしへ」とし、他は「をしゆる」「をしゆ」「をしゆ」とそれぞれしている。

これによれば曾良自筆本は素菴本でヤ行に表記されたもののほとんどをハ行として写しとり、朱筆をもつて校合を加えていることになる。だとすると曾良が写した草稿本(と杉浦氏の云われているもの)がすべてヤ行に書いてあつたのか、又は曾良が筆写の際に誤写したのかのいずれかの場合が考えられるのであるが、他の芭蕉の文で調べて見ると、信憑性のあるものにはハ行・ヤ行の区別があつて、このようなハ行に統一された場合は存在していないので、後者すなわち曾良が誤写をあえてしたということになる。誤写というのは語弊があるもので、むしろ規範意識をもつて書き直しを行つたというべきであろう。もしこの推定が成り立つとすればこのような仮名違いの点だけではなく、他の異同についても、草稿本と素菴本の異同であるのか、草稿本に曾良の規範意識によつて書き加えられた曾良本と素菴本との異同であるのか、はなはだ微妙な問題が生じて来る。もちろん当時こういった仮名遣の点では今日ほど神経質ではなかつたろうから、他と同一視するわけには行かないが、他の場合にも誤写とは考えられない書き直しの傾向がないとは云えないのである。したがつ

てこのことは曾良自筆本の信憑性の問題にもなつて来るのであるが、ここでは一応右のような疑問を提出するにとどめておきたい。(なお、別な機会に述べたいと思うが、仮名遣の問題では支考の手によつて伝えられた芭蕉の文は他の場合と違つていぢるしく非芭蕉的なものとなつてゐる。この場合も支考的な作為が色濃く認められるのは、程度の差はあるにしても修辭的な面ばかりではないこと、曾良の場合に似てゐる。)

最後に「伝ふ」「横たふ」の二つの場合であるが、連用形の語尾が「え」連体形の語尾が「ふる」とならず「ふ」となつてゐる点、共通してゐる。現在これを合理的に説明するだけの資料を持ち合せないが、連体形の点は、ある種のハ行下二段動詞は、語尾の「る」が脱落するという現象をかなり古くから示してゐたようである。これについては湯沢幸吉郎氏の「徳川時代言語の研究」「室町時代の言語研究」にも若干の例が指摘されているが、私の手許にある例だけでもかなりな量に達するので別にまとめて報告したいと思う。それと共に連用形の問題も説明出来ると思うのでここには両者の詳説は避けることとする。ただ、こういう特殊な語の場合を際いてハ行とヤ行の書き分けの行われてゐることは芭蕉の場合に云い得るといふことを重ねて述べるにとどめる。

## 二、パヂエスの日仏辞書に見える語について

最近パヂエスの日仏辞書が複製刊行されたために非常に便

利になつたが、奥の細道の解釈にも役立つことが少くない。今気づいた数例について報告しておきたい。

### 1 海浜にさすらへ

日仏辞書にこの「さすらへ」は「サスラエ・ユル・エタ」と「サスライ・ラウ・ラウタ」と下二段と四段と両方あげてあるので、当時兩様の活用が併存してゐたのであらう。解釈上には問題になるところではないが、間々あいまいな説明がしてあるところなのでとりあげた。なお曾良自筆本では「さすらへて」となつてゐる。本文上の問題はともかく、解釈には僕立つ点である。時として「漂泊のおもひやまず」の所に、「。」を打つて切つてしまつてあるが、「やまず(して)」の意にとつて、下の連用修飾句と解すべきではあるまいか。少くとも「さすらへ」で中止法となると考へる曾良本の方が正しい理解のしかただと思ふ。「海浜にさすらへ、去年の秋」とつゞけて読むのは、論外である。

### 2 「出立待るを」

「いでたつ」も日仏辞書では、「身なりをととのえる」の意の訳語を書いてゐる。最近註釈の方で単に「出発する」と解する従来の説に対し、この解をとる説が二・三あらわれて来たが、微妙なところであるが、出発するといふだけでは充分な解にはならないと思ふ。(なおこの意味は平安時代の文にもあるようだ。)

### 3 「草薙るおのこになげきよれば」

「なげく」については吉田澄夫氏「天草版金句集の研究」に説明がある。少し同書を引用すると、「居所も結構に心安う居ることも嘆かぬ」「万国に聞ゆることを嘆く」「われもそれに斎しからうことを嘆き」の例があげられ、日葡辞書の、「切望する或は大なる愛情を抱く」の訳語が示されている。右にあげた奥の細道の例も、諸書に窮状を訴えるの意などとして、今日の「なげく」の意をもつて解してあるが、この引用を参照すれば、少くともニュアンスのちがった解釈をほどこす方がより妥当するよう思われる。

### 4 「かかる桑門の乞食順礼ごときの人」

「ごときの人」は読み落されやすい個所であるが、井本農一氏の「奥の細道の文法」一七頁に「ごとしのこのようない方は、少し異例のものである」とされている。これも日仏辞書に、「ゴトキノ」として出でおり、「のような、の如き」の訳語がある。訳語は問題なく在来の通りで良いわけであるが当時熟していた語であつたことがわかる。湯沢幸吉郎氏は抄物の中の「コレゴトキノコト」「談義ヲ能スル人ヲ評スルト云如キノコト」「是ラガ如キノ者」をあげられ（『室町時代の言語研究』・一五三頁）、また「おのれらごときのばたく侍二十や三十は苦にする男でない」（『徳川時代言語の研究』・二九七

頁）をあげておられる。かたがた、この語がかなり耳に近いものであつたことが判明する。

### 5 「露通も此みなとまで出むかひて」

日仏辞書に「イデムカイ、カフ、カウタ」の活用が示してあるので、四段活用であつたことが知られる。（普通、文語では下二段活用である）。諸書に本来の姿をかかげているが、もちろん当時は四段活用が有力であつて、例はおびただしく見出される。二・三例示すると、

かのいら古崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、俱に旅ねのあはれも見、且はわが為に童子と成て（吉野紀行）

かけはしやまづおもひ出駒むかひ（更科紀行）

啼時は人不正の気を抱きて、かならず凶事をひいて愁を向ふ（鳥の賦）

寺町の白粉屋の娘、かたちも十人なみなれば是をよびむかひしに（万の文反古、二ノ三）

後家のおかめ出むかひ（女殺油地獄）

元祿時代ではむしろこの方が多いのであつて異例とするに足りないものである。

### 6 「呉天に白髪を重ぬといへ共」

これは日仏辞書ではないが、橋本進吉博士の「文祿元年  
天草版支丹教義の研究」に、「といへども」について次のような説

明がある。(同書九〇頁)

……「行くとも」「取るとも」「行けども」「取れども」  
よりも「行くといふとも」「取るといふとも」「行くとい  
へども」「取るといへども」の方が普通である。

キリシタン版の時代のこの傾向は、そのまま元祿のそれにあ  
てはまるわけではないが、意味の上で、「いへども」は「ど  
も」とつながりを持つていて、「とも」の意味には用いられ  
てはいない。奥の細通中に何ヶ所か出て来る。「といへども」  
を「とも」の意味に解釈するものが時々見られるが、誤訳と  
せねばなるまい。特にこの「呉天に白髪の恨を重ぬといへ  
共」のところは注意を要するところなのでこの項につけ加え  
ておく次第である。

以上、パチエスの日仏辞書の効用について二・三例示した  
が、実際にはかなりな量に達する検索が可能であつて、奥の  
細道だけではなく近世前期の諸作品を読解するためには有益  
な、というより必読の辞書であると云うべきであらう。ただ  
同書の解説にあるようにこの日仏辞書は日葡辞書とかなり出  
入があり、厳密に云えば日葡辞書に一々あたつて見る必要が  
あるのであるが、現状では日仏辞書でもかなり利用性が高い  
し簡便に披見出来るので、これにたよつてよいかと思う。ま  
た日葡辞書が外国人の手によつて成つたものであるため、成  
立の事情にもそれだけの制約があるわけだし、時間的にも元

祿とは一世紀近くへのあたりがあることも忘れてはならない  
ことであつて、濫用は危険であることもつけ加えておきた  
い。